

**【第4分科会】 ③**

**原島秀行先生（埼玉・埼玉県立浦和高等学校）**

**高等学校芸術科「工芸」のために～浦高工芸方式からの提案～**

**Q 1** 材料、道具を持ってこない生徒への対応、あるいは家の事情で揃えられない生徒へのサポート、また、その場合の評価はどうしますか？

**A** 材料、道具を揃えることができないので、どうしたらよいか。という生徒からの質問を受けたことは、今のところ1度もありません。家庭の事情が割とよい生徒が多いことあると思われませんが、道具は新品を用意する必要はなく、家にあるものをそのまま持ってくる生徒も多くいます。すべて錆びだらけのものを持ってきた生徒もいますし、親戚の家からもらってきた者、大工をやっていた父のもの、建具職人だった祖父のもの、さまざまです。木工道具というのはどこかしらの家にあるもので、やはり一番身近な道具なのだと感じます。もしも、どうしても道具が揃えられないという事情があった場合は、学校に卒業生が置いて行ってしまったものもありますので、その時はそれらで対処しようと考えています。材料も同様で、評価は他の生徒と変わりなくつけるつもりです。

**Q 2** 手道具についての予算はどのくらい使われていますか？

**A** 必ず揃えなさいと指示している道具は、平鉋、両刃鋸、両口玄能、追入れのみ3本（9・15・24mm幅位）、四ツ目きり、彫刻刀、差し金、巻き尺、スコヤ、けひき、ドライバー、ペンチ、クランプ2本、ミニほうき。  
家にあるものや、もらってきたものには費用はかかっていないと思われま  
す。購入してきたものは、ホームセンターで揃えて、鉋は最低6000～7  
000円のもの、その他含めて20000円～30000円だと思われま  
す。増田先生の頃から利用している、本職用の道具屋での購入ですと鉋が2  
5000円、のみ3本で20000円その他で合計55000円位。新入生  
（工芸選択）126名中20名ほどはそこで購入する生徒が毎年います。な  
るべく刃物だけは良いものを買えと指示しています。

**Q 3** 制作途中の保管場所がありますか？

**A** 材料庫と作品庫が1室ずつあります。（2年生が使用）床面積4M×6M位の準備室ほどの広さに、棚が設けられています。材料庫は126名分どうにか納まりますが、作品庫は作品の大きさ制限をもうけていませので、提出日近くなると、廊下に作品があふれます。1年生は道具箱置き場がありますので、制作中の材料はそこに、道具はロッカー（工芸専用3名で一室）に入れて鍵をかけ、共同で管理させます。

**Q 4** ケガをしないためにどう指導されますか？

**A** 手道具のみの作業ですので、のみで手を突くか、のこぎりで切る程度です。

それでも派手に切ると、病院で数針縫う怪我となります。私が授業中繰り返し生徒に言っているのは、「材料をクランプで固定して、両手で刃物を持って作業する」です。クランプはなるべく素早く固定できて、取り外せるもの（ワンアクションのもの）を勧めています。私自身が木工作业をしてみて、クランプの取り外しに時間がかかると、つい面倒くさくなり片手で材料をもち作業してしまう自分に気づきました。そうすると手が刃先にくる状態になり、怪我につながります。

**Q 5** 教員はどの程度の手助けをしているのでしょうか？木材の性質の説明はされますか？

**A** 全体への説明が必要な場面では、生徒を前に集めて実演等含めて説明します。授業中は見て回って、気になる生徒には声をかけてアドバイスします。木材の性質に関する説明は、脚物作品の材料を、自分で購入する前の時期に、プリントを配って一通り説明しています。学期の最後に生徒にアンケートをとるのですが、必ず数人、「先生の説明は長い」と書いてくるものがあります。制作時間が限られているので早く作業させてくれと言うことです。プリントを読めばわかることは、簡潔に説明するよう努めています。放課後残って作業している生徒には、自分から質問して来ない限り、特に声はかけません。

**Q 6** 授業時間外の作業は難しい。質と時間のバランスをどう取ればよいでしょうか？また、完成しない生徒はいないですか？

**A** 「時間と物の管理をしっかり」と、よく生徒に言います。だらしのない生徒、後片付けのできない生徒もいます。計画的に進められる生徒は、ほぼ授業時間内で制作を進めていきます。質は高いに越したことはないのですが、生徒も他にたくさん抱えていますので、基本的には自分で書いた図面通りのものができれば良しとしています。制作する作品は、生徒が案を出し、私がアドバイスして決めていきますので、生徒によって内容の差はかなり大きいです。採点日に完成していない生徒も若干名いますが、間に合わない者は、赤点となりますが、成績提出までの間に日にちをもうけて、提出されれば2をつけています。

**Q 7** 学力や気力のない生徒への指導はどうしたらよいでしょう？

**A** 中には、学力は低くても作ることは好きで、工芸の成績だけ5という生徒もいます。基本的に私は工芸の魅力は、素材と道具と技法にあると思っています。木工の場合、鉋がうまくかけられるかどうかで、その後のモチベーション度が大きく違うようです。何でもなかった木材が、鉋をかけることによって美しく変わる瞬間は生徒の心をつかみます。1年生の最初に鉋がけをして、「大変な科目をとってしまった」と、かなりの生徒の顔が引きつりますが、丁寧に一人ずつ鉋の調整をしてやり、勢いよくストレートな鉋くずが飛び出す体験をさせてやると、生徒の目の色が変わります。それぞれ素材には魅力があり、その魅力を引き出してやる道具をしっかり扱えるようにしてやることで、生徒はものづくりの入り口に立つのだと考えます。その後は、自分で鉋を調整できるようになるかどうかです。

**Q 8** 作品数、材料の自由度、授業時間外の制作を評価にどう配慮しますか？

**A** 授業時間外の制作は特に評価には入れていません。材料も自由に買ってきなさいですので、良い材料を揃えたからと言って、高い評価にはなりません。しかし、新木場まで行って、材木を自分の目で見て買って来た生徒は、最初からかなりモチベーションの高い生徒が多いです。作品数は道具箱、脚物作品、自由制作作品の3点ですので、各学期の提出、採点は以下のようにしています。

○1年生

- ・1学期、道具箱の側板を組むところまで。採点。夏休みの宿題で、天板底板の貼り付け。脚物作品の1次案提出。
- ・2学期、蓋と身の切断すり合わせ、金具類の取り付け、オリジナルマーク、氏名の彫刻。採点。脚物作品の最終図面提出。冬休みの宿題、道具箱の塗装。脚物模型制作。
- ・3学期、内装の完成、道具箱の完成。採点。1月中に脚物作品材料購入。2月より脚物作品制作開始。

○2年生

- ・1学期、脚物作品の完成。採点。夏休みの宿題、自由制作作品の三面図、見取図、材料図、模型。
- ・2学期、9月中に自由制作作品材料の購入、自由制作作品開始。途中経過採点。
- ・3学期、自由制作作品完成。採点。

**Q 9** 鑑賞領域はどのように扱っていますか？

**A** この質問と、「社会と工芸の領域は？」という質問が一番恐れていた質問です。代々行われてきた授業内容を引き継いだかたちで展開しており、制作に重きを置いている授業構成ですので、しっかりと時間をとっての鑑賞の授業は行っていないのが現状です。生徒は時間ぎりぎりまで作品を仕上げてきますので、制作途中で時間をとるのはかなり難しく、夏休み明けの文化祭（浦高祭）で、「工芸展」を開催して展示するのが精一杯といったところです。「社会と工芸」も、道具箱プラス作品2点のみの制作の中で1点取り込むことはかなりきついです。しかし、生徒は自分の机や椅子を制作する者もいますが、実際には、家族にたのまれて大きさや使い勝手を考え制作している者もかなりいます。しかし、公共性を考えた作品コンセプトといった観点から見れば、不十分でしょう。公共性の高いデザインコンセプトを持ったものを、木工の手作業でつくるといのは、現実的に見てかなり無理があるように思われます。正直なところ、これらの領域については、たくさんの先生方よりアドバイスを頂戴したいところです。

**Q 10** 1年のみの場合はどのように考えればよいですか？

**A** 芸術科目Ⅰのみという学校も多く、専任の先生方は授業時数確保のため学校設定科目を開設されたりと、ご苦労なさっていることと思います。諸先生方それぞれの考え方はあると思いますが、1年しかないからこそ、一つの素材、手道具に特化することは効果があるように思われます。1学期ごとに素材を変えていくと、そのたびに道具の扱い、制作の流れが違い、浅く広くはできますが、深めていくことは難しいでしょう。一つの素材にじっくり取り組むことによって、素材の良さ、道具の奥深さを必ず生徒は実感していくことでしょう。

芸術Ⅰのみの展開は、なるべく避けたいところですが、埼玉県でも増えつつあるのが現状です。特に伝統校で進学実績を優先するがためにⅠのみにしてまう。高校は進学予備校ではないのですから、伝統校ほど、どっしり構えて芸術科目を大切に考えてほしいものです。

浦高でもかつて芸術科目が減となる危機がありました。私が着任する前のことですが、平成12年、芸術科目をⅠ・Ⅱ・Ⅲ全員選択必修であったものを、Ⅲを総合選択科目として、Ⅰ・Ⅱを全員の選択必修と変更しました。その背景には、中学入試段階での中高一貫私学への受験生流失。高校入試段階においても大学受験を売り物とする私学や早慶附属校への受験シフトが深刻な問題となり、また2002年4月からの完全週5日制の実施の一方、総合的な学習の時間や情報などの新科目の実施などがあり、授業単位数・授業時数の確保が極めて困難な状況となったのです。それでもⅡまで必修をキープしたのは、さすが浦高だと感じます。この時、浦高は新世紀構想と銘打って、単位制を導入しました。

長くなりますが、以下に浦和高校「新世紀構想・単位制」の基本的な理念を抜粋します。

○新世紀構想の基本戦略と単位制の理念（平成12年度導入）

・根本的な発想

「知・徳・体のバランスを重視した教育」の実現と進学実績の向上の二つは、二律背反的にとらえがちである。しかし、浦高の教育力の特性を考えるならば、部活動や学校行事が盛んだからこそ、すばらしい進学実績を残していると考えるべきであり、部活動や行事などの全人教育的な教育活動と学業とは、互いに高め合う存在である。浦高の教育力の源泉は、浦高での生活を通して得られる多様で誇るべき体験が生み出す前向きな自己実現への意欲や、困難に負けないチャレンジ精神であると考えます。

しかしながら、進学校としての浦高が置かれている現実在即して言えば、「生徒の進路希望を実現する」ことが浦高の重要な使命であり、進路実績の信頼回復なくしては、全人教育の理想は実現されないということでもある。だからこそ、全人教育の実現と進学実績の向上の両立を図り高め合うことが、浦高の教育力を生かす道であり、新世紀構想の根本的な発想となっている。

・単位制による新カリキュラム

浦高の単位制は「進路希望を最大限かなえ、しかも教育の本質を見極めた全人教育を実現する」ことを目的としている。一般に単位制というと「受験に必要な科目だけを選択すればよい」と考えがちであるが、それだけでは大学受験を超えた長期的な成長につながらず、浦高の全人教育にも反する。受験で必要としない科目でも、将来までを視野に入れれば学ぶべきものがあり、文系・理系に関係なくすべての教科をバランスよく選択することが単位制の基本理念である。

以上長くなり申し訳ございません。当時の先生方の危機感と、高い教育理念を感じます。この新世紀構想も10年以上が過ぎ、現在見直しの時期に来ています。

**Q11** 工芸を授業で行うには、美術の中でやらざるを得ないのですが。

**A** 文科省の東良調査官、今回の第4分科会の講師、村上先生もおっしゃっていますが、美術の中で「工芸をやる」ことは避けた方がよいようです。実は私も前任校では、美術しかありませんでしたので、2年生で真鍮のペアスプ

ーンの作成や、1年生に籐のかごを編ませたりしていました。当時、毎年入試の倍率が1倍を切り全入状態でした。しかし、工芸的な内容には非常に食いつきがよく、これはやはり素材の魅力だと、私は思っています。

美術の中で工芸をやってはいけない理由ですが、美術の中で工芸ができるのであれば、独立した工芸という科目を美術の中に入れてしまえばよいという発想につながるからです。美術だけでもA表現(1) 絵画・彫刻(2) デザイン(3) 映像メディアB鑑賞と盛りだくさんであるのに、ここに工芸を入れたら美術が成り立たなくなります。しかし、苦肉の策として、デザイン分野で、「あくまでも工芸ではなくデザインとして、制作コンセプトもしっかり展開させ、展開することは可能だ」と、村上先生は「工芸という文言を使わないでやってください」と講評で述べていました。

私は、工芸が万が一美術科目に吸収されたら、日本の文化を直に受け継いでいる貴重な科目の損失になると思います。明治になり西洋文化が入ってくる前の江戸時代までは、襖絵、仏像彫刻、建築などもすべて私は工芸の分野だと考えます。職人が高い技術を駆使して伝統に学び、苦悩し、新たなものを創造していく、常に時代の革新を担ってきた分野です。

#### Q12 工芸科再興に向けて、授業実践以外にどのような取り組みができるでしょうか？

A 工芸科再興に向けては、まず現在開講している工芸を維持すること。工芸免許を持っている先生方が、積極的に工芸を開講すること。音美工書4科開講がベストですが、埼玉県などでは、音美書がほとんどになっています。そこに工を加えることができればよいですが、できなければ、音工書も有り得るか。さらには一人の先生で美工両立もあり得るか。専任の教員を置く上で、授業時数の確保も考え苦慮する中で、美工両立が成り立つかは、学校内での教務、時間割、クラス割との連携が重要と考えます。

工芸科目の存在意義で言えば、日本の伝統と文化を、色濃く生徒たちに伝えることができる科目であることを、アピールすることだと思います。そしてさらに根源的には、手に道具を持つという、人類の歴史600万年続く本質的な行為の不変性と、それが人を進化させる唯一の教育的行為だと説くべきです。人間を進化させるのは、ロケットでもパソコンでもポケモンでもなく、手に道具を持つことだと思います。小学校から中学校、高校での芸術科目の中で、生徒が手に道具を持ち、「考える力」「創造する力」を育むことは、これからの日本を創る原動力になる！位にでっかく言ってよいと思います。それが工芸科再興(再考)につながり、また日本の伝統文化を見直し、好きになり、日本人として胸を張って世界に出ていく人材育成にもつながると考えます。付け加えるなら、「考える力」「創造する力」に加えて+「美考力(美しいとは何かを考える力)」が加われば、鉄板、いや鋼となるでしょう。

私自身、美術から入って、西洋文化の素晴らしさ、工芸を学んで自国文化の素晴らしさに気付かされました。教師として工芸を教えていて、この先その気付いたこと=感動を下の世代に伝えていくことは、私に与えられた教職としての使命であり、上の世代への恩返しだと思っています。

たくさんのご質問ありがとうございました。